

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

未来を予測しようとする評論家のなかには、マネジメントや意思決定に関わる職種のみが残ると考える人もいます。それとは逆に、人と接するホスピタリティを要するような仕事が残っていくと主張する人もいたり、クリエイティブな芸術家や人を楽しませるようなエンターテインメントといった要素が重要になってくると考える人もいたりする。予測の一つひとつを詳しく聞けば、なるほどと思わないでもありませんが、どれも何か当てにならないように思えます。

AIの実用化からは少し遅れることになるかもしれませんが、ロボティクス(ロボット工学)関連の技術が急速に進んでいます。優れた職人のような手先の器用さをもちながら、疲れることを知らないロボットをつくることも、夢ではありません。こういうものに、カーツワイルが予測するAIを組み合わせれば、人間にできて機械にできないような仕事など理論上ひとつもありません。すべてが技術的に可能なのであれば、残されるのは、それで経済的に①採算がとれるかというコストの問題だけです。

いつか単純労働はロボットのような機械に置き換えられ、より②高度な頭脳労働はAIがやることになる。Xそんな未来予想図を目の前にして、今度は一人人間には何が残されるのかということ③不安になってしまふ。そして、不安のあまりに勇気を失って自縄自縛に陥ってしまうことが、私はある意味で一番まずいことだろうと思います。

実をいえば、このような現象は昔から何度も繰り返されてきました。

なかでも④有名なのは産業革命期、一九世紀前半のイギリスで起きたラダイト運動でしょう。自動織機などの新しい機械が次々と導入されることによって、自分たちの伝統的な仕事が奪われることを危惧した職人たちは、この機械を文字通り破壊して回りました。

後の労働運動にもつながったといわれているこの事件を振り返ってみれば、職人たちが抱いた不安は半分だけ当たっていたものの、半分は的外れなものだったといえるかもしれません。

歴史のなかで技術革新とともに消えていったさまざまな職種と同様、産業革命によってたくさん伝統的な手仕事がなくなっていく、職人たちは途方に暮れました。しかし一方で、新しい産業の進展はそれよりも多くの仕事を生み出し、人々は新たな職業を見つけて働くようになったわけだ。

今でもそれは基本的には同じでしょう。企業は積極的にAIやロボットの導入を進めています、それに⑤成功すれば新たな労働力のニーズも生まれることになる。労働人口の減少によって、A現在の日本では圧倒的な人手不足が起きているくらいなのですから。もちろん、懸念は大いにあります。

今もすでに広がりつつある格差が、AI時代にはもっと大きくなるかもしれません。このままいけば、AIを活用して富を生み出すことのできるごく一部の人が儲かり、それ以外の人は仕事を失ってしまう可能性は高い。

イスラエルの歴史学者aユヴァル・ノア・ハラリが書いた『ホモ・デウス——テクノロジーとサピエンスの未来』という本は、そのようなc恐るべき未来をd描いた⑥警告の書でした。

AIとデータ処理の力を使い、いわば神のように君臨する一握りのエリート層が大多数の「無用者階級」を支配する。そんな「究極の格差社会を描いた禍々しい未来像を読んで、よい気分になる読者はあまりいないでしょう。

B、広がり続ける格差という現実、AIの実用化に先立つIT時代において、すでに始まっています。

マイクロソフトのビル・ゲイツやアマゾンのジェフ・ベゾスといった巨大企業の経営者たちが、新しい技術によって生み出された富を文字通りかき集めてしまふ。それは、1%の人間が99%の富を独占してしまうような世界といえるでしょう。こうした傾向が加速していけば、まるでSF映画の設定みたいだに思えた「無用者階級」が現実のものとなっても不思議ではありません。

考えてみれば、Y新しいテクノロジーによって富が集中したとしても、集められたお金をどうするかということは別問題であるはずだ。社会のなかで、富をどう分配すべきか？ それは、どんな理由でお金を稼いだ人がいたとしても、考えなければならぬテーマだ。

ITやAIのような最新技術を促進するからといって、未来が必然的に格差社会でなければならぬ、という理由はないはずだ。それは、かつて王様に集中していた権力を市民が革命によって奪ったりすることと同じ、やはり古くて新しい政治的な課題なのです。

AIによって仕事が奪われるのではないか、という不安を直接的にAIの脅威、C私たち個人がもつべき能力と関連づけるべきではないと私は考えます。ここには本来、社会のシステムをどう設計するべきかという、より大きな問題があるのです。

たとえば今、仕事は昔よりもきつくなっているのに、なかなか評価されない。今の若者たちは昔よりもレベルが低いなどといわれ、賃金も低く抑えられている。非正規社員と呼ばれる人の仕事量が増え、しかも高度な能力が求められるようになっていふ。そのような状況があるからといって、IT技術を否定すべきではありません。

技術ではなく、社会のシステムに何か問題があると考えるべきでしょう。

(齋藤孝『超AI時代の「頭の強さ」』による)

(注1) マネジメント——管理や経営。(注2) ホスピタリティ——おもてなし、思いやり。

(注3) カーツワイル——アメリカの発明家・思想家・未来学者・実業家。ある時点を境に、AI(人工知能)が人間の知能をはるかに上回るようになるという「技術的特異点(シンギュラリティ)」が来ることを予測した人物。

(注4) 自動織機——水力や電力を動力とした布を織る機械。(注5) 危惧——危ぶみ、おそれること。

(注6) ニーズ——必要、需要。(注7) 懸念——気になって不安に思うこと。

(注8) 禍々しい——不吉な、よくない。

